

# 夢窓幼稚園通信第47号

2025年 11月 28日

静かなしずかな夜に、星たちが輝く広い空の下に立っていると、天空から私たちのところへ、途切れることなく何か大切なものが「絶えず」…「降り注いでいる」という感情が湧き上がってくるのです。

そして中学生のときに音楽の授業でうたった『冬の星座』の歌が身体の中から響いてきました。

木枯らし 途絶えて 湧ゆる空より  
地上に降りしく くすしき光よ  
ものみな 魏える しじまの中に  
きらめき 揺れつつ 星座はめぐる

私たちは自分の立ち位置から、そしてもう少しなく情報を通じて感じられる世界の中で生きていますが、そもそも私たちの過ごす地球も銀河も…ものすごい勢いで動いているらしい宇宙の中にあり、遠い宇宙の果てに放り出されることもなく、昨日も今日もこうして生きていられるのですから、何だか生きるということは奇跡的なことのような気がしてきます。

そんな風な気持ちになると、子どもたちとの昼間のやりとりのひとつひとつが、より愛しく思えてきます。

朝のお母さんとの離れ際に、大声をあげて大切な目の部屋になかなか入れず、それでもごっこ遊びに盛り上がり何のこともなく、とお昼ご飯に戻っていったおの子のことも、いっしょけんめいの史太磨きの表情も、いっしょにお茶を飲んで、ただそれだけで何だかとてもいい気分になる時間が、階段を上る音かしたかと用北部屋のガラス戸をコツコツたたき手を振り降りていく子もいれば、「はいっていい？」と尋ねソローでしばしくつろぐ子の様子、「カムシが池におちた」とか「ボールにくぎ入れて！」の依頼…、そして時に携帯電話に大きくなった様かしい年国生から言葉が漏れたり…、みんな広い宇宙の中で展開している小さな、それでも、その時その場でしか起こらなからたり、立ち会えた特別な出来事です。

それぞれの「ひとつ」の人と人とのやりとりや出来事にかが光のなさを感じ、よろこび合える祝福の感情が、クリスマスに向かうスタートなのかもしれません。

わたしたち一人ひとり、宇宙存在たちの「産ることへの願ひ」によって生まれ、生かされているのですね。

園長 弁光 泰雄